VOL.1 酒蔵編3（50音順）

ルポライターのハーティちゃんが紹介するシリーズ"酒蔵編"…
第3回は、御影郷に属する剣菱酒造㈱と㈱神戸酒心館を訪ねました。

片や、老舗の風格と貫禄を伴い不変の美を貫く蔵元。片や、時代の波をよみ将来性あるプランに向かい革新を掲げチャレンジし続ける蔵元。

一見相反するようですが、両蔵元共にその髄には、「感謝の気持ちを込めて何時の世にも愛され続ける酒造り」を通し「酒文化を創造し未来へと継承していく」揺るぎない情熱と使命感が脈々と流れていました。

取材：広報委員／海崎、古川、高永（文・イラスト）

剣菱酒造 株式会社

代表取締役社長　白樫達也氏
東灘区御影本町3－12－5
創業年：1505年頃（永正2年頃）

自慢の一品「黒松剣菱」
口に含んだときに「ゴク味」、その後に米の旨みが口に広がり、上品な余韻を残す、鮮やかなキレが心地よい特撰酒。

室町時代から500年以上も続く、古さでは有数の蔵元である。現代まで蔵元当主が何軒か替わり、現在の白樫家は大正時代末期に引き継いだ5軒目の当主である。創業から伊丹で醸造していたが、昭和初期になって祖父が受け継いだ時に現在の住吉の地に移転した。500年の万物流転の時を経て今日に至るまで、戦争や震災、そして淡麗辛口のブーム到来と、危機とも試練とも呼べる時がいろいろあった中、「古今第一トス(昔も今も一番良いの意)」の精神のもと技と感性を磨き、商標を今に受け継ぎながら昔と変わらない味を提供し続けている。

また、江戸末期、愛飲家のひとりでもあった漢詩人・頼山陽は、「長古堂」のなかで剣菱の商標に関して、「墨くろぐろと縦、横一筆づつの剣の刃先と菱形を書き、昔から改められたことがない」すなわち「質実であれば変動せず、変動しなければ永続する」と、剣菱の酒造りに対する姿勢そのものと長寿であることの所以を説かれている。剣菱のゆるぎない精神と原点は、多くを語らずともこれらのことが全てを物語っているといえよう。

江戸時代

現　在

白樫社長曰く、『そもそもお客様から頂いたお金は、「このお酒が美味しいから同じお酒を造ってください」という願いが込められたもの。私たちは頼山陽をはじめ500年の昔からこの味で評価を頂いたのですから、何時までもこの味を清く守り、お客様に届けることを誇りに思ってやみません。』…優しさ溢れる温厚なお人柄の奥に「不変であることの潔さ、美しさ、誇り」を見いだした。

株式会社 神戸酒心館

代表取締役社長　安福幸雄氏
東灘区御影塚町1－8－17
http://www.shushinkan.co.jp/
創業年：1751年（宝暦元年）

自慢の一品「福寿　大吟醸」
軽快でフルーティな吟醸香と、涼やかで綺麗な味わいが特徴的な大吟醸酒。

酒蔵といえば、一般的には伝統的なたたずまいを想像する中、ここ「日本酒とその文化を創造する本格酒蔵」と銘打たれた「館」には、他に類のないモダンな仕掛けが日没と共にその姿を現す。長屋門をくぐった正面の酒蔵の白壁に昼間の様子からは思いもよらない「楽しむ館」に相応しい光の彫刻が浮かび上がる。（イタリアのコルネーリ作）

第二次世界大戦で酒蔵、隣接の自宅までも全焼したため、石屋川沿いの焼け残りの地に移っての運営再開。平成7年1月、さらに拡大を遂げた「プラン実現」当日の朝、阪神淡路大震災という未曾有の大試練を迎え、木造蔵が全壊する。想像を絶する苦労を重ねての復興の日々の中、「将来性のあるプラン」が練られ、免震構造の醸造棟を中心に木造の酒蔵を利用した多目的ホール、販売店舗棟、料理店棟から成る複合施設を建設。平成9年12月グランドオープンを迎え今日に至っている。

『地元神戸を国内はもとより、海外からも多くの人々に訪ねてもらえる魅力ある元気な街にするために、民族酒は不滅であるという信念のもと、伝統的な酒造りに徹しながらも常に革新をしていきたい。』と熱く語られ、次世代を担う若者や海外に向けての日本酒普及の取り組みについて…等々「温故知新」を座右の銘とする安福社長の話は尽きない。

手造りにこだわった酒造りだけに止まらず、広角に張り巡らされたアンテナから時代に沿った新たな文化産業を創造するマルチ酒蔵のオーナーは、一見穏やかな海の彼方にやがて到来する波をよみ、万全体勢で波待ちをしているサーファーさながらである。きっとどんなビッグウェーブが来ようとも悠々と楽しんで乗りこなされるに違いない。